

(2) 多様な教育的ニーズに対応する授業づくり

通常の学級には、障害等の有無にかかわらず様々な教育的ニーズをもつ児童生徒がおり、多様な教育的ニーズを踏まえて授業を行うことが重要である。

多様な教育的ニーズに対応する授業づくりは、これまで通常の学級の担任が行ってきた授業づくりの方法と基本的には変わらない。授業づくりについては、計画－実行－評価－改善（P－D－C－A）サイクルで授業の改善を進めていくことが大切である（図7）。

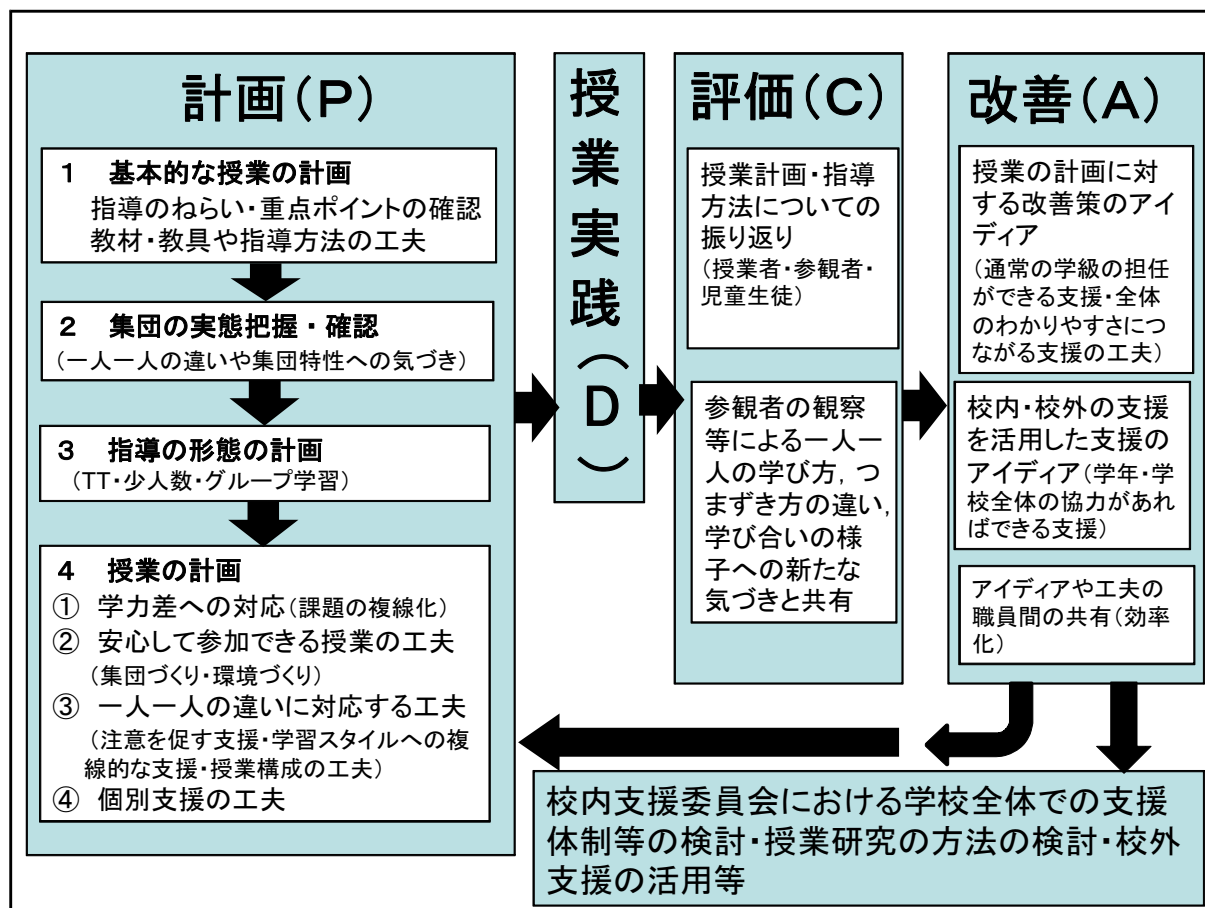


図7 多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの流れ H19・20年度研究より

多様な教育的ニーズをもつ集団に対して授業を改善していくためには、まず、教師が一人一人の児童生徒の学び方やつまずき方の違いや、特別な教育的ニーズをもつ児童生徒の授業における困難さに気づき、理解する目を鍛えることが重要である。また、授業研究等の機会を利用して、複数の指導者の目で、多様な学び方やつまずき方に気づき、多面的な児童生徒理解から多くの指導の工夫や支援のアイデアを出し合うことも大切である。

授業づくりを進めて行くにあたっては、通常の学級の担任が一人でも可能な指導や支援から、学校全体で取り組む必要のある指導や支援まであることを十分に理解することが大切である。更に、これらの指導や支援の手立ては、特別な教育的ニーズをもつ児童生徒のためだけではなく、全ての児童生徒にとって

の分かりやすい授業づくりや学力の向上にも結び付くものとも考えられる。

このように、一人一人の違いに対応する支援の考え方として、全ての児童生徒に分かりやすい「ユニバーサルデザイン」の考え方が授業等に取り入れられてきている。ユニバーサルデザインの考え方を生かした授業とは、全ての児童生徒にとって分かりやすい授業のデザインであるが、この考え方は、授業だけでなく、学校あるいは地域社会全体が、多様なニーズをもつ人々にとって安心して参加できるものとなることを願うものでもある。

この考え方を分かりやすく伝えるために、「ユニバーサルデザインの教育」に関するキャラクター「ユニバ君」を考案した（図8）。

左手は、手のひらを上に向け、「支える」様子を表し、右手はあごの下をさわり、手話の「幸せ」を表している。

「特別な配慮を必要とする子どもを支えることは全ての子どもの幸せにつながる」ということを意味している。



図8 ユニバーサルデザインの教育に関するキャラクター「ユニバ君」

通常の学級において、児童生徒のつまずきや困難さに対応するための具体的な指導の工夫や支援のアイディアは、特別なことではなく、普段の授業の中で行っている何気ない工夫やアイディアであることも多い。

「ちょっとしたユニバーサルデザインの教育の工夫」，略して「**チョニバ**」（図9）を「ユニバ君」のミニキャラクターとして考案し、前回の研究で提案した「多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト一覧」と対応さ

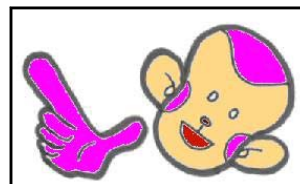


図9 チョニバ

せた（資料1）。そして、学習の場面等で活用できる具体的な指導の工夫や支援のアイディアを「支援シート」にまとめ、多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リストの4つの視点を「**特別支援教育の視点**」として整理をした。なお、支援リストの項目の色とチョニバの色は対応している（図10）。

水色のチョニバAは、指導形態の工夫や学習課題の複線化など、基本的な授業の計画における工夫に対応している。支援内容のポイントとしては、児童生徒一人一人の特性や学級集団の特徴などの実態把握、そして、それを基にコース別学習，少人数指導，ティームティーチング，グループやペア学習など，可能な学習指導の形態を検討することが挙げられる。また，学習課題の複線化，教材・教具の工夫など，学習活動に対する児童生徒の反応を予測し，準備することも，基本的な授業の計画の重要なポイントとなる。これらに関する内容については，水色で示す。

ピンクのチョニバBは，安心して参加できる授業の工夫に関する内容に対応

している。支援内容のポイントとしては，一人一人の違いを認め合う集団づくりと分かりやすい学習環境やルールへの明示が挙げられる。具体的には，児童生徒を賞賛できる場面を意図的に設けること，様々な学び方や考え方を認めたり，児童生徒同士で学び合ったり助け合ったりできる場の設定，雰囲気づくりに関する内容等をあげた。また，学習環境やルールについては，見通しのもちやすい授業構成，板書や掲示物等の工夫がポイントになる。授業の準備や片付け，発表や質問等のルールもはっきりと決めておき，他の教科の授業でも取り入れられることは，共通のルールとして活用することで，児童生徒が安心して授業に参加できる工夫のポイントとなる。これらに関する内容についてはピンクで示す。

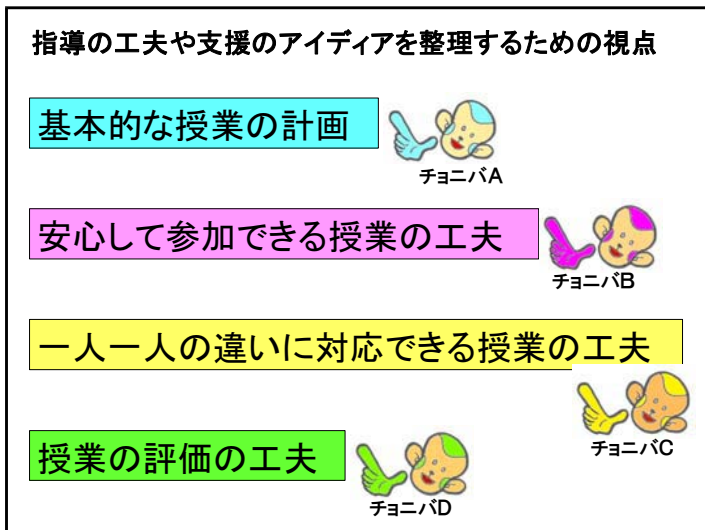


図10 指導や支援のアイデアを整理するための視点

黄色のチョニバCは，一人一人の違いに対応できる授業の工夫に関する内容と対応している。支援内容のポイントとしては，まず，「授業への注意や集中を促す支援」や「学習スタイルの違いへの複線的な支援」を挙げる。これらについては，特定の児童生徒のみの支援ではなく，その児童生徒を含む全ての児童生徒に対して効果的であるものという視点を大切にしている。

一方，授業の中で個別的な支援が必要な場合もある。それに関しては，「個別に対応しやすい授業構成の工夫」として取り上げる。児童生徒が理解しやすい学び方や自分にあった課題を選択したり，分からないときにどうするかを示したりするなど，一斉指導の中で個別に対応しやすい授業構成，学習形態を工夫することがポイントになる。これらの視点に関する工夫は，黄色で示す。

緑のチョニバDは授業の評価の工夫に関する内容と対応している。児童生徒がどこでつまずき，どのように指導すれば理解しやすいのかを常に振り返りながら，指導方法を改善していくことが必要になる。その上で一つの単元，1時間の授業の中での評価を形成的評価や児童生徒の自己評価等で確認しながら，柔軟に授業を改善していくことが大切になる。児童生徒への客観的な評価や児童生徒の自己評価，また教師の指導方法の評価につながる工夫については，緑色で示す。

【多様な教育的ニーズに対応する授業づくりの支援リスト一覧】

A 基本的な 授業の計画	1 授業のねらいの確認・実態把握・指導の形態の工夫 2 学習課題の複線化 ・児童生徒の学力差の実態に応じて、中心的課題に対する補足的課題、発展的課題を想定して、教材・教具や指導方法を検討する。	 チョニバA														
B 安心して 参加できる 授業の工夫	1 一人一人の違いを認め合う集団づくりの工夫 ・賞賛的な授業の進め方 ・誰もが発言・質問しやすい(わからない、困ったといえる)雰囲気づくり ・いろいろな答えや考え方があってよいという雰囲気づくり ・一人一人が活躍できる場面の導入 ・子ども同士で学び合う・助け合う場面の導入 2 分かりやすい学習環境やルールの明示 ・児童生徒が見通しをもちやすい授業の構成の工夫 ・授業の流れの明示、進行状況の板書 ・授業の準備・片付けのルールづくりと明示 ・発表や質問のルールづくりと明示	 チョニバB														
C 一人一人の 違いに対応 できる授業 の工夫	1 授業への注意や集中を促す支援 ・黒板や教師に集中しやすい教室環境の整備(掲示物の整理、席順) ・アイコンタクトや身体接触 ・身体(姿勢)の意識化 ・声の抑揚・スピードの変化 ・具体物やフラッシュカードの提示 ・授業の構成の工夫(短時間のユニット) ・イメージ化しやすい言葉かけ ・静かな時間の導入 2 学習スタイルの違いへの複線的な支援 <table><tr><td>○視覚優位(●聞くことが苦手)</td><td>□聴覚優位(■見るのが苦手)</td></tr><tr><td>○授業の流れ・まとめの計画的板書</td><td>□板書・教科書を音読する</td></tr><tr><td>○カード等で課題や約束等を示す</td><td>□一つ一つ言葉で説明する</td></tr><tr><td>○プロジェクター・パソコン等による提示</td><td>□順序立てて考えられる手順のヒント</td></tr><tr><td>○動作化(空書等)、体験的な学習</td><td>■板書文字の大きさ・色・行間の工夫</td></tr><tr><td>○図表や記号を使ったヒント</td><td>■計画的な板書(黒板の分割)</td></tr><tr><td>●簡潔な指示 ●具体的な指示</td><td>■板書が難しい場合のプリント準備</td></tr></table> 3 個別に対応しやすい授業構成の工夫 ・プリント学習や作業課題の導入による机間支援による個別支援 ・机間支援しやすい席順 ・選択場面の導入(内容、プリントのマス目の大きさ、ヒントカード等) ・ヒントコーナー、確認コーナー、質問コーナー等の設置 ・グループ学習(学びあい)の活用	○視覚優位(●聞くことが苦手)	□聴覚優位(■見るのが苦手)	○授業の流れ・まとめの計画的板書	□板書・教科書を音読する	○カード等で課題や約束等を示す	□一つ一つ言葉で説明する	○プロジェクター・パソコン等による提示	□順序立てて考えられる手順のヒント	○動作化(空書等)、体験的な学習	■板書文字の大きさ・色・行間の工夫	○図表や記号を使ったヒント	■計画的な板書(黒板の分割)	●簡潔な指示 ●具体的な指示	■板書が難しい場合のプリント準備	 チョニバC
○視覚優位(●聞くことが苦手)	□聴覚優位(■見るのが苦手)															
○授業の流れ・まとめの計画的板書	□板書・教科書を音読する															
○カード等で課題や約束等を示す	□一つ一つ言葉で説明する															
○プロジェクター・パソコン等による提示	□順序立てて考えられる手順のヒント															
○動作化(空書等)、体験的な学習	■板書文字の大きさ・色・行間の工夫															
○図表や記号を使ったヒント	■計画的な板書(黒板の分割)															
●簡潔な指示 ●具体的な指示	■板書が難しい場合のプリント準備															
D 授業の評価 の工夫	1 授業の評価の工夫 ・教師の指導方法等の評価、児童生徒の自己評価の活用 ・多様なつまづき方や学び方への気づき ・学習形態の改善・工夫、校内外の資源の活用を検討	 チョニバD														

資料1 多様な教育的ニーズに対応する授業づくり支援リスト一覧とチョニバ

① 基本的な授業の計画

水色のチョニバAは、指導形態の工夫や学習課題の複線化など、基本的な授業の計画における工夫に対応している。



チョニバA

特別な教育的ニーズをもつ児童生徒は、集団の中で補充的な課題を必要とすることが多い。授業全体が分かりやすい構成になっていること、参加できる学習場面があること、そして補充的な課題においてよりきめ細やかな指導や支援が計画されていることが必要となる。通常の学級の担任が、一人一人の児童生徒に個別に対応しようとするのではなく、補充的な課題を必要とする児童生徒の集団に対して、どのような課題が適切か、どのような指導方法が有効かという観点で授業を計画する。

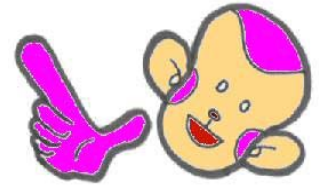
補充的な課題としては、教科学習の系統性からみた既習事項の学習、指導のポイントからみた具体的、体験的な学習場面の導入などが考えられるが、繰り返しの指導による効果がみられない場合などには、特別支援学級担任や特別支援教育コーディネーター等と連携した実態把握や個別の指導計画を立てることも必要となる。

また、発展的な課題が必要になる児童生徒への課題や支援内容について、事前に計画を立てておくことも、児童生徒一人一人の違いを認め合いながら、自ら参加できる授業づくりのための重要なポイントとなる。以下に支援項目、および支援の内容とポイントを示す。

支援項目	支援の内容とポイント
A-1 授業のねらいの確認・実態把握・学習指導の形態の工夫	
① 授業のねらいの確認	・ 学習指導要領、教科書等を参考に、授業の中心になる課題を明らかにする。
② 学級の集団の実態把握	・ チェックリストの活用や行動観察等から、学級集団の特徴や児童生徒の一人一人の特性を把握する。 ・ 既存のチェックリスト等を活用するが、専門的な判断を必要とする場合は、特別支援教育コーディネーターや特別支援学級の担任に相談する。
③ 学習指導の形態の工夫	・ 授業の中心的課題や集団の実態から、可能な学習指導の形態を検討する。 ・ 少人数指導、チーム・ティーチング、グループ学習等の検討。
④ 教材・教具の工夫	・ 授業の中心的課題について、つまづきやすいポイントをおさえ、分かりやすい教材・教具、指導方法を検討する。 ・ これまでの授業研究等で出された改善策やアイデアを活用する。
A-2 学習課題の複線化	
① 発展的な学習課題や補充的な学習課題を準備し、指導方法を検討する。	・ 授業の中心的課題について、さらに深めていく方法を検討し、集団の実態から発展的な課題や補充的な課題の準備をする必要とする児童生徒への課題内容を検討する。

② 安心して参加できる授業の工夫

安心して参加できる授業の工夫についてはピンクのチョニバBを対応させた。



安心して参加できる授業の工夫の内容として次の2点を挙げる。

ア 一人一人の違いを認め合う集団づくりの工夫

チョニバB

特別な教育的ニーズをもつ児童生徒は、得意なことがある反面、自分の努力ではどうにもならない「分からないこと」や「できないこと」等があることが多いため、学習に対して不安感をもっていることがある。また、強い叱責に対して、自分とは関係ない場面でも、非常に不安な気持ちになってしまうことがある。また、「〇〇をしない」等の否定的な言葉の意味の理解に困難を示すために混乱してしまう場合もある。具体的に何をすればよいか肯定的な表現で示し、授業を展開していくことで授業全体の安心感を高めることができると思われる。また賞賛する場面では、特別な教育的ニーズをもつ児童生徒だけをほめるのではなく、一定のルールの下で、全ての児童生徒に関心に向け、よいところを認めることが大切である。

一人一人の違いを認め合うためには、一人一人が自由に発言できる雰囲気が必要である。分からないときは質問してもよい、間違えてもよいという授業の雰囲気をつくることは、児童生徒が自主的に授業に参加しやすい環境を整えることにもつながる。また、ペア学習やグループ学習等を導入し、児童生徒が互いに学び合える授業を進めることも大切である。

イ 分かりやすい学習環境やルールの明示

特別な教育的ニーズをもつ児童生徒の中には、聞くことを苦手としたり、「今、自分が何をすればよいのか」「これから何をすればよいのか」等、見通しをもつことを苦手としたりする児童生徒もいる。このような児童生徒にとって、進行状況を視覚的に確認できたり、自分のやるべきことが分かりやすく明示されていたりすることは、大きな安心感につながると考える。

また、できていないことを単に注意・指摘されるだけでは、自分がどうすればよいか理解できずに不安になってしまう児童生徒もいる。学級、あるいは学校全体として基本的な学習のルールを決めておくことで、不安感をもちやすい児童生徒にとっては安心して学習に取り組める環境になると思われる。同様に、ルールを視覚化することで、学級集団の全ての児童生徒が自分の取り組むべきこと等を確認することができ、より安心感を高めることができる考える。以下に、支援項目および支援の内容とポイントを示す。

支援項目	支援の内容とポイント
B-1 一人一人の違いを認め合う集団づくり	
① 学級の雰囲気づくり	・ 教師が全ての児童生徒一人一人を大切に思っていることを伝える ・ 間違えることや、分からないことは、悪いこと、恥ずかしいことではない雰囲気づくり。 ・ 許可を求める表現、教えて欲しいと要求する表現を教える。 ・ 物事の感じ方や考え方は一人一人違ってよいことを伝える。
② 教師の表情や声	・ 教師が笑顔、穏やかな表情でいることや、落ちついた声で話すことで、安心感を与える。 ・ 声の大きさだけで、叱られていると勘違いする児童生徒への配慮。
③ ポジティブな表現での切り返し	・ 自己肯定感が低い児童生徒の否定的な表現を受けとめた上で、「〇〇はきっとできるよ」「〇〇のようないいところもあるね」とポジティブな表現で切り返す。
④ 教師がモデルを示す	・ 特別な教育的ニーズをもつ児童生徒ができるようになったこと、努力していることを周囲の児童生徒に伝える。 ・ 周囲の児童生徒に、教師が、関わり方のモデルを見せる。
⑤ 友達モデル	・ してほしい行動をする友達に気づくような支援を行う。 ・ モデルになる友達が、授業中に視覚に入るような席順を工夫する。
⑥ 活躍できる場面、活動の用意	・ 授業の中で、活躍できる役割を与えて、賞賛する。 ・ 係活動などで一人一人に役割をもたせる。
⑦ 賞賛	・ できている子を賞賛。タイミング良く賞賛する。サインや表情、声での賞賛を行う。 ・ 賞賛はみんなの前で、注意はそっと。 ・ できていない子を注意するより、できている子をほめる。
⑧ 肯定的な表現	・ 「××しない」ではなく「〇〇しよう」と指示する。してほしいことを分かりやすく言葉にする。 ・ 「××できなかったら□□はなし」ではなく「〇〇できたら□□ができる」と、前向きになる表現で、何をすればよいかを伝える。
⑨ してほしい行動への対応	・ してほしい行動は、さりげなく無視する。子どもを無視するのではなく、その行動を無視する。
⑩ 落ち着ける場所、部屋の用意	・ 一人で落ち着くことのできる場所（図書室・空き教室）などを用意して、興奮したとき、落ち着かないときに誰でも利用できるようにしておく。
⑪ 宿題の工夫 家庭との連携	・ 宿題の分量や内容を増減させる。 ・ 一人一人が違う内容、分量でもよいルール、雰囲気をつくる。 ・ 予定表等を用意して家庭でも事前に準備・練習をすることをお願いする。
⑫ 忘れ物への準備	・ 忘れ物をした場合の、ノートや消しゴム、鉛筆など、代わりの物を用意しておく（線やマス目は同じ方ものを用意しておく）。 ・ 「〇〇がないからできない。」を少なくし、授業に参加できる安心感を育てる。
⑬ 教え合い、助け合いの場面の導入	・ 学級活動の中で、積極的にグループ活動を取り入れる。 ・ 児童生徒間で、教え合ったり、助け合ったりする活動を授業の中に日常的に導入することで、自然に教え合う状況を作っていく。 ・ グループのリーダーとなる児童生徒を育てる。 ・ コの字型など、顔の見える座席配置の工夫をする。
B-2 分かりやすい学習環境やルールの明示	
① 机の上の整	・ イラスト等で、机の上の教科書、ノート、鉛筆等学習に必要な物

理整頓	の配置を明示しておく。どこに何を置くかを決めておく。
② ルールの設定	- 何をどのように、どのくらい、どこまで行うかを決め、わかりやすくする。学校全体に適用するとよい。 - 発表や質問の仕方、声の大きさ等のルールを教える。 - しっかりと叱ることで、教師への信頼感、安心感を高めることもある。わかるように叱ることが重要。
③ 授業のパターンをつくる。	- 見通しをもたせることで安心感をもたせる。 - 集団の流れを安定させ、視覚化することで、何をすればよいかをわかりやすくする。
④ ルールや授業の流れの理解への視覚的手がかりの活用	- 授業の流れやルールを視覚化しておく。 - スケジュールや変更点を視覚化する。 - 一日の流れを、小黒板に貼っておく。言葉で言ったことを、視覚でも訴える。 - カードや写真を使用する。 - 教科書のページ等の進行状況を板書しておく。
⑤ 終わりの明確化	- いつ、どのくらいで終わるか。何をしたら終わるのか。具体的に明示する。 - 掃除では、誰がどこを、どのような手順で、どのくらいまできれいにするかを明示する。

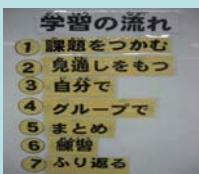
◆ 一人一人の違いを認め合う集団づくりの工夫

- ほめる場面を増やして、肯定的に話そう！
- 主体的に参加できる場面を作ろう！
- 誰もが発言・質問しやすい雰囲気を作ろう！
- 「わからない」「おしえて」といえる雰囲気を作ろう！
- 教え合ったり、助け合ったりする場面を作ろう！



◆ 分かりやすい学習環境やルールの明示

児童生徒が見通しをもちやすい授業の工夫をしよう



授業の流れの明示、教科書のページ等の進行状況の板書

授業の準備・片づけの方法のルールの明示



授業中の発表の仕方、質問の仕方、声の大きさのルールの明示



声の大きさ

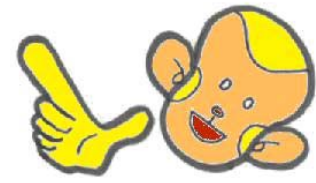
学習の構え
話すときは
場に応じた声で
相手を見て
根拠をもとに
聴くときには
話す人に注目して
自分の考えと比べながら
最後までしっかりと
根拠をもとに
態度
相手の考えを受け止める
相手の気持ちを受け止める
うなずき・あいづち

中学校の教室で

③ 一人一人の違いに対応できる授業の工夫

一人一人の違いに対応できる授業の工夫については、黄色のチョニバCに対応させた。

「一人一人の違いに対応できる授業の工夫」とは、ある特定の児童生徒に対してだけの有効な支援を考えるのではなく、全ての児童生徒に対して効果的な



チョニバC

支援としての授業の工夫を指している。「授業への注意や集中を促す支援」と「学習スタイルの違いへの複線的な支援」については、このような視点から取り上げている。

一方、本人が理解しやすい学び方や自分にあった課題を選択したり、分からないことを教師や友だちに質問したりするなど、授業の中で個別的な支援が必要な場合もある。その視点については「個別に対応しやすい授業構成の工夫」として取り上げた。

ア 授業への注意や集中を促す支援

この支援は、小学1年生のように一斉指導の授業に慣れていない集団において必要になる支援であり、他の年齢段階においても、児童生徒の注意や集中を促す場面として、特に授業の導入部分で活用できる支援である。特別な教育的ニーズをもつ児童生徒の中で、特に注意や集中の持続が困難な児童生徒に対しても有効であると思われる。

イ 学習スタイルの違いへの複線的な支援

障害の有無にかかわらず、全ての児童生徒にとってそれぞれ自分が学びやすい学習のスタイルがある。認知処理スタイルと言われることもあるが、視覚的な情報を活用することが得意で、物事の全体像をとらえてから学習するタイプ（視覚優位、同時処理様式）、聴覚的な情報を活用することが得意で、時系列的に順番に学習をするタイプ（聴覚優位、継次処理様式）、発語や書字、身体表現などの動作を伴うことで学習が進むタイプ等、様々な学習スタイルの特性がある。どの学級にも学習スタイルに様々な特性をもつ児童生徒が混在していることを想定して、それぞれに有効な指導や支援（複線的な支援）を考えることが大切である。

ウ 個別に対応しやすい授業構成の工夫

全ての児童生徒を対象とした学級集団に対する指導や支援を中心としながらも、やはり、特別な教育的ニーズをもつ児童生徒に対する個別的な指導や支援が必要となる場合もある。一斉指導の様々な場面で、声をかけたり机間指導を行ったりするなどの配慮も可能であるが、個別に対応しやすいように授業の構成等を工夫することも有効である。

また、通常の学級の担任が個別支援を行うためには、事前の教材等の準備が必要になる場合があり、一人で行うには限界がある。基本的には、特別支援学級担任や特別支援教育コーディネーターに相談して、支援内容を検討したり、学年、教科の教師等と協力したりしながら、教材等を準備しておくといわれる。必要に応じて学校全体で、ティーム・ティーチ

ングや少人数指導等の教師間の連携による支援の導入を積極的に検討していくことも大切である。以下に、支援項目および支援の内容とポイントを示す。

支援項目	支援の内容とポイント
C－1 授業への注意や集中を促す支援	
① 教室正面の整理整頓	・ 黒板や正面壁面の不必要な情報を取り除く。 ・ 黒板には授業に関することのみを書く。正面の壁面は、授業中は無地のカーテン等で覆うなどの工夫をする。
② 導入の工夫	・ 前時の内容の確認に〇×クイズ、フラッシュカード等を使用する。 ・ 頭や目の体操なども効果的。覚醒・集中を促し、スムーズに授業に入る。
③ 姿勢の工夫	・ 授業に集中しやすいよい姿勢について、「背中をピンとのばしてみよう」、「だれがよい姿勢だと思いますか？」など、姿勢を意識させる。 ・ 良い姿勢を図に表して明示する。
④ 座席の工夫	・ 教師の近くや一番前の席を集中しやすい特別な席にしておいて、集中の難しい児童生徒やがんばりたい児童生徒が座れるようにしておく。
⑤ 授業のテンポと間合い、声の抑揚	・ 集団としての授業の流れのテンポを維持していくことで注意を持続させていく。 ・ 学習内容によっては、思考を促すための間合いをいれることも必要である。 ・ 声の抑揚の変化で注意を促す。
⑥ 静かな時間の導入	・ 騒然とした中では、授業にならない。 ・ 教師の「黙りなさい」「静かにしなさい」もうるさい音の一つ。静かになるために、「音のない時間」をカウントダウンで始める。終わりの静かな言葉で話す。
⑦ 授業の流れの一定化とユニット化	・ 同一教科（単元・題材）であれば、45分をいくつかのユニット（10～15分）に分け、一定の流れを作る。 【例：国語】 音読→話し合い→書く→発表→まとめ ・ 静と動の組み合わせも有効である。
⑧ 動ける時間の導入	・ プリント配り、〇〇係として、授業中に動く場面を作る。動きたくなる気持ちをリセットすることで、再び集中することができる。 ・ 授業途中での、気分転換。低学年であれば歌遊びや、手遊び。高学年であれば、クイズや体操を導入する。

⑨ 列指名の工夫	・ 指名する順番を明確にすることで、発言のルールを守ることができる。 ・ 発問は、多様な発言ができるものにする。どの列から答えさせるかを工夫する。 ・ 周囲の児童生徒や教師がヒントを与えることも有効である。
⑩ クラス全体に話をするとき（アイコンタクトや身体接触の活用）	・ 全体への話しかけが、自分に話しかけられていると思うことができないこともあるのでアイコンタクトや身体接触を活用する。 ・ 話すときには、「〇〇さん・・・」と始める。 ・ 話すときには、目をあわせてから始める。 ・ 話すときは、肩に手を置くなど、注意を喚起してから始める。
C-2 学習スタイルの違いへの複線的な支援	
① 板書の工夫	・ きれいな黒板を心がける。必要のない情報は書かない。 ・ 形式を一定に。子どものノートのマス目と一行に書く字数を同じにするとよい。 ・ 板書の文字の大きさ、色、行間を全員が読みやすいように工夫する。
② 授業の中で の視覚的教材 の活用	・ 言葉だけでは、イメージがわからない児童生徒のために活用する。 ・ 参考作品や準備物の具体物や写真を提示する。 ・ プロジェクター、実物投影機、パソコン等を活用する。 ・ 約束や課題はカード等を書いて提示する。
③ 授業のポイントの複線的支援	・ 重要な部分は板書して、しっかりと音読する。 ・ 大切なことは、言葉、文字、イラストを有効に使い、見る・読む書くことで、複線的に確認する。
④ 図や記号を使ったヒント	・ 言葉で説明するだけでなく、問題を解く場面では、図表や矢印などの記号を使ってヒントを出す。
⑤ 順序を意識したヒント	・ 問題を解く場面では、①〇〇をする→②△△を書く→③□□をするのように順序立てて考えられるマニュアル等を用意する。
⑥ 一時一作業 一文一動詞（動作）	・ ノートを取るとき、作業をしているときに、他の説明や情報を入れない。 ・ 一回の指示で、二つの指示はさける。
⑦ 指示・説明は簡潔に	・ 集中時間が短いことが考えられるので、要点を絞り簡潔に短く話す。視覚的な補充もする。
⑧ 結論を先に	・ 「〇〇について、三つすることを話します。一つめは…、二つめ

話す	は…」のように結論を先に話す。
⑨ 具体的に話す	「あれ」「これ」「それ」「だいたい」「もう少し」「ちゃんと」などを具体的に話す。量や数値，具体的な指示をする。 - 図や式などで書かれているものを一つ一つ言葉でも説明する。
⑩ 言葉のイメージ力	たとえを上手に使う。「〇〇のように〇〇しましょう」など，言葉だけの指示でも，イメージがふくらみ分かりやすい。
⑪ 実際の動作や体験的学習の導入	- 文字を書く前に，空書を全員で行うなど，身体を使った動作を取り入れる。 - 実際に具体物を操作する体験的な学習を取り入れる。
⑫ ノートやプリントの工夫	- 本人に合ったマス目のノートや，プリントを選べるようにしておく。 - 書くことが苦手な児童生徒のために板書と同じプリントを用意しておく。

C-3 個別に対応しやすい授業構成の工夫

① 席順の工夫	担任が机間支援しやすい席順にする。
② プリント学習や作業的課題の導入（同一課題の中で内容を変える）	- プリント学習や作業的な学習の場면을意図的に計画して，個別支援を行う。難易度の異なる複数の課題（プリント）を用意しておく。 - 自分にあった課題，プリント，ヒントカード等を選択できるようにする。
③ ヒントコーナー，確認コーナー，質問コーナーの設置	授業の中で，プリント学習や作業的な学習の時間のときに，ヒントコーナー，確認コーナー，質問コーナー等を設置して，自分に合った学習内容を選択することができるようにする。
④ グループ学習の工夫	- 児童生徒同士で教え合ったり，助け合ったりする場面を導入する。 - 適宜，教師による個別支援も導入する。話し合いの進め方等をわかりやすく示しておくことが必要。 - 継続的に行う中でグループのリーダーとなる児童生徒を育てることも重要である。

④ 授業の評価の工夫

授業の評価の工夫については緑色のチョニバDを対応させた。



チョニバD

多様な教育的ニーズをもつ集団への授業の中で、児童生徒のつまずき等に対する現段階での学習の成果を把握し、その後の学習指導を改善していくために形成的評価を行うことは重要である。具体的な到達目標を示し、進捗状況を児童生徒自身や教師が評価していく結果として、望ましい評価が得られれば、児童生徒の学習意欲が高まることが期待できる。また、評価をすることで特別な教育的ニーズをもつ児童生徒のつまずきや困難さに気付き、児童生徒を理解する力が高まり、一人一人の違いに対応できる授業の工夫に取り組むこともできると考える。

授業の評価のポイントとしては、評価から見いだされた改善策が、通常の学級の担任による指導や支援として可能であるかどうか、全ての児童生徒のわかりやすさにつながっているかどうかである。授業者の指導方法だけでなく、児童生徒のつまずき方や学び方、学び合いにおける活動の様子等を細かく観察することも必要である。以下に、支援項目および支援の内容とポイントを示す。

支援項目	支援の内容とポイント
D-1 授業の評価の工夫	
① 評価規準による学習の到達度等の評価	・ 授業のねらいに基づいて評価を行う。毎授業行うことが難しい場合は、単元単位程度で評価を行う。 ・ 客観的なテスト、観察、自己評価等の多様な評価方法を組み合わせる。 ・ 個別の指導計画を作成している児童生徒については、個人目標に対する評価を行う。
② 教師の指導計画及び指導方法の反省	・ 毎回の授業でも行うが、授業研究等を積極的に活用して、複数の教師で評価し合う。 ・ 「基本的な授業の計画」「安心して参加できる授業の工夫」「一人一人の違いに対応できる授業の工夫」について、有効であったこと、改善点を評価する。
③ 全ての児童生徒のつまずき方や学び方の違いへの気づき	・ 特別な教育的ニーズをもつ児童生徒やその他の児童生徒のつまずき方や学び方の特徴を観察する。 ・ 複数の職員（サポートティーチャーを含む）で観察することで、担任だけでは気づきにくい部分の情報を得る。 ・ 職員間で共有することで、児童生徒理解の力を高める。
④ グループ学習等の学び合いの様子への気づき	・ 児童生徒同士の学び合いの様子を観察し、コミュニケーション面についての実態について観察する。 ・ 複数の職員で観察し、担任だけでは気づきにくい部分を観察する。 ・ 学び合い、教え合いを充実させるための工夫点について検討する。
⑤ 校内外の資源の活用の上での必要性の検討	・ ティーム・ティーチングや少人数指導等の学習指導の形態の工夫専門機関等との連携の必要性等について検討する。 ・ 通常の学級の教師が一人で悩むことのないような、校内支援体制、相談体制を整備する。